

肢体不自由教育と知的障害教育の連携による書字指導の工夫

—コロナ禍における連携指導の実践事例—

○河野文子 阿部敦子 吉田崇* 諏訪肇*
(筑波大学附属桐が丘特別支援学校) (東京都立羽村特別支援学校) (東京都志村学園*)

KEY WORDS: 肢体不自由 知的障害 書字指導

(はじめに)

これまで、肢体不自由教育と知的障害教育の連携による書字指導の実践を継続して行ってきた。多くの実践事例がある肢体不自由教育における書字指導の基礎研究の成果を発達障害や軽度知的障害のある知的特別支援学校職業学科及び普通科の実践に積極的に生かしてきた。これらの指導におけるいくつかの問題点とそれらへの手立ての工夫を以下の通り報告する。

(目的)

本研究の目的は、肢体不自由教育と知的障害教育の連携により、特別支援教育の対象である児童生徒への書字指導の工夫を行ない、それらの効果を検証して新たな指導法の開発を目指すものである。

(方法)

なお、本研究及び発表を行うにあたり、対象児（ご家族）に口頭にて内容の確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、書面にて署名により同意を得たものとした。

対 象：肢体不自由特別支援学校在籍の児童生徒 13 名、知的特別支援学校在籍の中学部生徒 9 名及び知的特別支援学校在籍の高等部生徒 10 名 計 32 名

期 間：20XX 年 6 月～20XY 年 9 月（16 ヶ月）

内 容：①国語科及び自立活動での指導

②余暇活動での指導その他

③オンラインによる授業交流

1) 共通の課題を使った教育実践について

「GRIT(やりぬく力)」は、社会に出ていくための実践を高める力として注目される。「GRIT」は、生まれ持った才能・知能は関係がないと言われ、成功者にはこの「GRIT」があるとされている。誰もが具えたこの「GRIT」のうち I nitiative(自発性/自分で目標を見据える力)の育成に、「決意の一文字」は有効である。書くにあたり、自分で目標を考え、書き、掲示するという一連の指導は、シンプルであり、障害の有無に関わらず分かりやすい。

従来から肢体不自由特別支援学校においては、毛筆によって書字を行なうことによって、文字学習が効率的に進められることに加え、活動全体によって児童生徒の自己肯定感の向上が示されていた。その指導を知的特別支援学校の教育実践に活かす方法を考えた。

2) 肢体不自由特別支援学校での実践①

コロナ禍であり、オンラインでの学習が続いた後、ようやく学校に登校できるようになり書写の学習を行なうことができるようになった 6 月に、まず肢体不自由特別支援学校の児童は、それぞれ漢字一文字で、そのときの自分の気持ちを表した。小学部第 6 学年児童が選んだ題は、それぞれ「緑」「新」「生」「喜」「夢」であった。その後は、月に 1 回計 7 回書写の時間に毛筆での指導を行なった。卒業式が間近に迫った 2 月に「決意の一文字」を書く際に、それぞれの児童が選んだ題は「家」「進」「生」「学」「無」であった。6 月に「生」を選んだ児童と 2 月に「生」を選んだ児童は別

である。決意を一文字で表すことは実は難しいことであり書く文字を選ぶのに時間を要するかと思われたが、全員 5～10 分で書く文字を決めて書き上げていた。

3) 肢体不自由特別支援学校の実践②

小学部から書道を継続して行なっている中学部第 2 学年の生徒 A と第 3 学年の生徒 B は、月 1 回それぞれの課題の手本（行書）を見ながら書いた。一点一画のトメやハネを意識して正確に書くという楷書の書き方から、筆の穂先を柔らかく使って文字の線の流れを生かすように意識して書くという行書の書き方に戸惑うと思われたが、文字のバランスが整えば自分の思ったように筆を進めることが可能である行書の方が、むしろ生徒らは書き易いとのことであった。文字の線が多く重なる画数の多い難しい課題であっても、積極的に取り組みとても良い作品を書いている姿が多く見られるようになった。

4) 知的特別支援学校での実践①

脳性麻痺で下肢機能のみ麻痺ある（上肢にはない）が、すぐパニックを起こして泣いてしまう生徒 C は、泣かないことを目標に「泣」と書いた。「決意の一文字を書いたので僕は泣きません」と事ある毎に言ったり、廊下に掲示してある「泣」の文字を見て「僕は泣かないって決めたんで」と言ったりするようになった。時々泣くこともあったが、大きく乱れることが少なくなり、特に登校時には泣く姿は見られなくなった。

5) 知的特別支援学校での実践②

中学部第 1 学年（小学部から進学）の脳性麻痺（右半身麻痺）の生徒 D は、書道が未経験であった。字を書くことが苦手で、タブレットは大好きであった。「字を書くなんてやだ」と言っていたが、「上手い下手ではないんだよ」「自分の思っていることを書けばいいんだ」と書いた文字を肯定的に評価したところ、「書くのが楽しい」「書道は今度いつやるの」と態度が変わった。文字に添える落款を、スチロールボードに鉛筆で書いて彫るやり方で作成し文字に添えた。そのことも格好よく見え、嬉しく感じたようであった。

(結果)

「決意の一文字」を書き掲示することで、決意を何度も確認でき、自ら自分を目標に向かって変えようとする力となった。成長に結びついた。「決意の一文字」は非常にシンプルで、視覚的にダイレクトに入ってくるので、自分を律するルーティンに組み込むことができ、効果的であった。文字の形だけを評価するのではなく、「書は人なり」と言われるように、文字に託された思いや個性を評価できる。周囲から評価されることで、自己肯定感の醸成につながる。

(考察)

本研究と「肢体不自由教育と知的障害教育の連携による書字指導の工夫Ⅱ、Ⅲ」の研究により、特別支援教育において障害種別の枠を超え連携して書字指導の工夫の幅を広げることで、さらに生きる力が育成されることが分かった。今後も実践・検証を重ね指導法の開発を進めていく。

(KAWANO Fumiko, ABE Atsuko, YOSHIDA Takashi, SUWA Hajime)